

---

実況パワフルプロ野球15 サクセス（神楽坂編） few years later

イザナギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実況パワフルプロ野球15 サクセス（神楽坂編）      f e w  
y e a r s   l a t e r

### 【Nコード】

N 0 1 3 4 V

### 【作者名】

イザナギ

### 【あらすじ】

パワプロ15、2009の神楽坂編の後日談です。

聖ちゃんとの約束がかなうときってこういう状況だったら良いな、なんて思ってた書いたものです。

若干恋愛風味？いえ、可愛い可愛い言ってるだけです（何色々痛いですが、勘弁してください

———  
ライトが眩しいなあ。

最終回のグラウンドに出た俺『小波<sup>こなみ</sup> ケイ』が、最初に思った感想。

ブルペンでいつものように数十球投げ込んで、いつものようにマウンドへ向かったつもりだ。

———  
でも、いつもと同じ感覚じゃないのはなぜだろう。  
グローブやスパイクの具合を見ても、調子の悪い時に感じる手足の重さがない。むしろ、いつもより軽く感じるほどだ。

なぜだろう。そう思って目線をあげると、案外すぐに答えに辿り着いた。

ゆっくりマウンドまで歩いて行く俺を待つチームの輪の中に、彼女を見つけたからだ。

———  
『六道<sup>ろくだう</sup> 聖<sup>ひじり</sup>』

俺を、神楽坂グループを代表するピッチャーにまで鍛え、俺に『つつておき』を教えてくれた、俺の恩人。

雨の日、涙に濡れながら野球への絶望を叫び、それでも俺の言葉で野球を愛し続けることを決めてくれた。

甘いものが好きで、たまに俺に、おはぎを作ってくれたっけ。ものすごく甘かったけど、ものすごく美味かった。

彼女の野球人生にはあまりいい思い出はないらしいが、それでもテスト入団して一軍にまで上り詰め、こうして目の前にいる。

今日は序盤から乱打戦だった。

初回から点の取り合い。両チームともに毎回ランナーが出る。

そんな試合がこう着したのは7回。

表に、相手に1点をリードされた直後、相手が逃げきりのために自慢のリリーフ陣を送り込んできた。

7回を三者三振に切って取られ、完全に向こうのペースに乗るかと思われたのだが、8回表をどうにかこちらのリリーフが踏ん張って、流れを断ち切る。

しかし8回裏のマウンドには、全日程の中頃まで来て防御率が1点をきるような怪物が送り込まれた。

先頭打者の二番打者を三振で切って取られ、そのまま逃げ切られるかと思った矢先、万年二軍からスタメンの3番にまで登りつめたルーキーが、ボテボテのサイドゴロを気迫のヘッドスライディングで

内野安打にした。

ここで4番に回るわけだが、なんとここで4番がまさかのバント。確実に送り、ツアアウト2塁として、3番と同じくスタメンまで這い上がった5番打者<sup>ルーキー</sup>。

このルーキー、得点圏打率七割の化け物で、ほとんどが長打。そして一塁が空いているので、相手バッテリーが選んだ答えはもちろん――敬遠。

これでツアアウトながら1、2塁。しかしうちの六番はここまでノーヒット、再三のチャンスも潰している。

そこでベンチが動く。

代打として出てきたのが――女性選手『六道 聖』

相手が女性だからと甘くかかったのだろう。彼女に対してそんな攻め方をするなんて、下策中の下策だ。

インコースにやってきた甘い直球を一閃。

左中間を深く切り裂いた。

走者一掃のタイムリーツーベース。

代打、しかも女性選手の一振りで逆転したことで、ピッチャーは動揺したように見えたが、次の7番を、まるで親の仇のように三球三振で切って取られた。

そして、9回。クローザーである俺が呼び出され、アナウンスでコールされて、ここにいます。

あのあと守備交代しようと思ったたら他のキャッチャーは怪我で離脱してたらしいので、そのまま聖ちゃんがマスクをかぶることになった。

内野手の輪の中に入る俺。

コーチからボールを手渡され、「調子はどうだ」と聞かれた。

――絶好調に決まってる

そう答えたらコーチは大笑いして俺の背中をたたき、「頼んだぞ」と一言だけ言ってベンチへ帰っていった。

内野のみんなも口々に俺を励まして、背中をたたいて守備位置に戻っていく。

残されたのは、俺と聖ちゃんの二人だけ。

とりあえずグローブで口元を隠して、会話をする。

「……………やっと来たね」

「ん……………長かった」

聖ちゃんの眼はキラキラしてて、それでどこことなく涙目にも見えた。よっぱど待ち焦がれたんだろう。それに…………

「約束、守ってくれたね」

「……当然だ。私をここまで導いてくれたのは、ケイなのだからな」  
「ありがと、聖ちゃん」

——いつかプロのマウンドで

神楽坂からプロに入るとき、聖ちゃんが入部するときに俺と交わしてくれた約束。

味方同士、なんて偶然で、でもとても嬉しかった。

社会人で最後の大会の前にやったキャッチボールの続きを、今から再開しよう。

俺ができた恩返しは神楽坂の野球部への入部くらいだったけど、でも聖ちゃんがここまで来たんだから、俺の行為は間違ってたな、って思える。

「じゃあ、いつちょやりますかあ」

「……そういえば、プロの試合でボールを受けるのはお前が初めてだ」

「え、マジで？」

へえ、なんか嬉しいな。

聖ちゃんの初体験のお相手になれるとはね。

「むう………変な意味に聞こえるぞ」

「気にしない、気にしない。——それに」

「？」

『とっておき』も今まで温存してきたから。

そう言う、なぜか聖ちゃんは顔が真っ赤になった。

なんで投げないんだ、とか、あれを使えばもっと楽になっただろうが、とか言ってきたけど――

聖ちゃんに捕ってもらいたかったし、聖ちゃん以外が捕れる保証もなかった。

そんなことを言えばもっと赤くなった。――かわいいなあ。

――鈍<sup>なま</sup>ってないだろうな？

赤い顔で聖ちゃんはそれだけ確認した。

もちろん、恩人からもらった武器を鈍<sup>にぶ</sup>らせるわけがない。

相手打者3人の傾向と基本的な投球方針、ついでに球種とサインを確認して、聖ちゃんは扇の要へ。

――なんだろう、この安心感。

聖ちゃんからリードが来る。俺はそれに頷くと、セットポジションから全身のばねをくまなく使って、指定されたコースへ腕を振り切る。

右打ちの3番の胸元、インハイに、聖ちゃんの構えと寸分たがわな

い位置にボールが放られ、まるで吸い込まれていくようにボールがミットを叩いた。

スピードガンは155?/hと表示。うん、絶好調だ。

相手に休む暇は与えない。次のサインに頷き、思いっきり腕を振り切る。

先ほどよりやや低めでわずかに外れているが、球速が格段に遅い。ヌルリ、と右打者から逃げるように変化していく。――

――スローカーブだ。

『入る』と覚<sup>おぼ</sup>つたのだろうが、もう遅い。

緩急に思わず打者は転んでしまう。

スピードガンは110km/hと出た。

そしてすぐさま聖ちゃんからのサイン。……やっぱり、よく分かってらっしゃる。

緩急で慣らされてしまった目に、150km/h越えのストレートは厳しいだろう。

真ん中高めに渾身のストレート。それも、ストライクゾーンぎりぎりの。

俺のボールは『ノビ』があるらしい。だから高めに来ると浮くように感じること。

だから打者は思わず見逃したが、入ってるので

「ストライーク!! バッター!!! アウツ!!!」

大げさな動作でアンパイアが三振を宣言する。

さあ、この調子で終わらせよう。

右の四番打者。こちらは外人な分、多少大ざっぱでも良いんだけど、一発が怖い。

でも、真っ向勝負で負ける気はしないね。

俺の強気が伝わったのか、聖ちゃんのサインが強気だ。

……いや、聖ちゃんって英語もできるから、相手に何か言われたのが分かったんじゃないかな……。

……まあいいや。

さっさと終わらせる。

三球ともストレート。インロー、アウトロー、インハイで見事に扇風機になってくれた。

あと一人。勝利を待つファンの声援も一層熱くなってきた。

一発があれば同点だから、相手側の応援もヒートアップしていく。

この、異様な熱気に包まれる空間。この瞬間が、俺の感情を興奮させる。

最後の打者は左打ちの五番。

聖ちゃんのサイン。頷く。

俺のフォームに合わせて観客が叫ぶ。

まずはアウトハイからほぼアウトローまで落ちる『本気』のフォーク。入ったようで、審判の手が上がる。

一軍の捕手でも後逸したりするのに、一発で捕ってくれた。

『普通』のフォークよりキレも落差も大きいのに。やっぱりすごいな。

次にインコース。高めに渾身のストレート。観客の声による後押しもあってか、いつも以上に伸びてる気がする。

打者も振り遅れないようにバットを振るが、かすりもせずにボールの下を振った。

あと一球。

聖ちゃんはストレートのサインだけど、首を振る。

あ、困ったような顔をした。

スローカーブ――違う。

フォーク――違う。

『本気』のフォーク――違うよ。

もっと良いのがあるじゃん。

残りの選択肢は一つで、それを思い出した瞬間、こっちから見ても分かるほど聖ちゃんは顔を赤くした。

反応が一々可愛いなあ。

赤くなりながらもコースの指示。それには素直に頷く。

プロ三年目にして、初披露の『とっておき』の一球。

聖ちゃんにしか取れない、特別な『魔球』。

オリジナルはサイドハンドだったけど、握りを工夫してオーバーハンドでも完璧に再現した。

最後の一球が放たれる。  
インコースの真ん中。

パツと見は、抜けたようなストレート。  
打てる、と思っただのかバットを出す打者。

と、その瞬間。

何の変哲もないはずのボールが滑り、滑らかな三日月をストライクゾーンに描いて、まるでそこに来るのが分かっていたかのようにかまえられてた聖ちゃんのミットに収まった。

これが俺の『クレツセント・ムーン』。聖ちゃんとっぴおきの先輩、『橘みずき』が編み出した魔球だ。

スタジアムが歓声で爆発する。

そのなかで俺と聖ちゃんは歩み寄り、握手した。

「……クレツセント・ムーン。みずきが右投げになったのかと思っ  
た」

「教えてもらった時はサイドでの投げ方だったから、あとでいろいろ工夫したんだ。どう、錆びてなかった？」

「……ケイに教えて正解だった。錆びるところか傷一つない」

嬉しそうに笑う聖ちゃん。

俺も、そう言ってもらえてうれしいね。

このあとチームのみんなとハイタッチして、ウィニングボールを勝利投手の奴に渡そうとしたら、「六道さんにあげて」だって。みんな良い奴らなのさ。

この試合のヒーローは、一点差をおさえた俺と、もちろん逆転タイムリーの聖ちゃん。

『ツアウトでの代打起用でしたが、緊張はしましたか?』

「え、えと……とにかく打つことに集中した……しました……」

『9回には守備について、小波選手をリードしましたが、どうでしたか?』

「うう……こ、コントロールが良くて……リードしやすかった……です……」

今、緊張でうまくしゃべれない聖ちゃんに、腹話術みたく後ろから助言してやってます。  
といっても敬語の注意くらいだけど。

と、マイクが俺の方を向いた。

『今回、初めて六道選手とバッテリーを組みましたが、どうでしたか?』

「そうですね。リードも上手いですし、キャッチも上手ですから、安心していろんなボールを投げられました」

『最後のバッターに対しては、今までの小波選手の持ち球に無かつ

たボールで三振を取りましたが、あれは何だったんでしょうか？」  
「あゝ、あれっすか？」

ふつ、と聖ちゃんの方を見ると、半分拗ねてるみたいだった。  
それに苦笑しながら、インタビューに答える。

「あれは、俺の『とっておき』です」

観客席がドヨドヨする。

新球種披露の興奮が冷めないんだろうか。

アナウンサーが、締めの一言を求めてきた。

『最後に、ファンの皆さんに一言、お願いします』

「えゝ、みなさん！　どうか『六道 聖』をよろしくお願いします  
！！」

場内が暖かい笑いに包まれる。

そんななか、いきなり注目の的にされた聖ちゃんは顔を真っ赤にさせながら、オロオロしていた。

アナウンサーが、聖ちゃんへマイクを持っていく。

聖ちゃんが俺の方へ助けを求める視線を送ってきたけど、助けてあげない。主役は聖ちゃんだからね。

——オロオロする姿が、小動物みたいで可愛い。

『六道選手からも、どうぞ！』

「えと、えと……こ、これから、精進していきます………あ、

応援、よろしく」

場内から、温かい拍手。

アナウンサーが締めの一言を言って、中継が終わった。

俺はそのまま帽子を取って手を振る観客にあいさつする。

聖ちゃん………ぼーっと観客席を見ていた。

目じりに涙も見える。

夢にまで見た光景だったのだろうか。自分がプロの舞台に立ってる  
ってこと。

でもさ、これは夢じゃないんだ。

たとえ夢だとしても、ずっとずっと続いていく夢なんだよ。

途中で覚めてしまったとしても、この夢が正夢だったって証拠は、  
たくさんあるんだから。

頭をクシャクシャとなでてやる。

涙目で睨まれても怖くないよ。

「さ、戻ろっか」

「……………ん」

テレビのインタビューとかで遅くなって、結局、帰るのは一番最後になってしまった。

ロッカールームで荷物を片付けると、女子の更衣室の方へ向かう。

………のぞかねえよ。

聖ちゃん、車持ってるらしいから、送ってもらっただけだったの。まあ、俺も免許持つてるけどね。

女性を待たせるのも、あんまりよろしくないし。

ドアをノックする。返事がない。

名前を呼んでみる。これまた返事がない。

不用心にも鍵のかかってないドアを恐る恐る開けると、バッグを抱えて眠り込んでいる聖ちゃんがいた。

試合とインタビューが終わって、気が抜けたのかな。

よっぽど緊張したんだろう。ちよつとやさそつとじゃ起きそうにない。

………はあ、しょーがない。聖ちゃんの家は教えてもらってるし、俺が送るか。

ここがホームで助かったよ。

自分のバッグと聖ちゃんの分、そして聖ちゃん自身を負ぶって、駐車場への道に行く。

思ったより軽い背中の感触を感じながら

「（車に乗るときくらいは起こそうかな）」

なんて考えてた。

願わくば彼女が見る夢が幸せであるように。

願わくば彼女がずっと自分の好きなことを好きなだけできますように。

誰にともなく、俺は祈る。

シンデレラ・ストーリーがいつまでも続くことを。

そんな聖<sup>シンデレラ</sup>ちゃんは、俺の背中で気持ち良さそうに眠っていた。

）  
完  
）

（後書き）

どうも、イザナギです。

長編の息抜きで作りました。五時間ぶっ続けで……

そんなら長編の方を書けよ！そうツツコまずにはいられない……  
聖ちゃん可愛いよ聖ちゃん。  
これが言いたかっただけです。

小波 ケイの能力はこんな感じ  
MAX156km/h コントロールB スタミナE オーバース  
ロー

変化球：フォーク4（普通）、フォーク6（本気）、スローカーブ  
2、クレッセントムーンプ  
ノビ5、安定度4、ピンチ4、奪三振、投手威圧感

フォームは藤川球児風でさらに全力投球してる、って感じでしょう  
か。

こんなの実在したら、即メジャークラスですよ。しかも社会人とは  
いえ三年目の新人だし。  
厨設定ですね。でも反省はしてない。

こんな駄文をここまで読んでくださった皆様方に、百万の感謝を！！  
ではっ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0134v/>

---

実況パワフルプロ野球15 サクセス（神楽坂編） few years later

2011年10月9日10時16分発行